

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

長崎・雲仙で民主集会、「開門を」声相次ぐ

農相「意外」驚き隠せず・諫早湾干拓

【毎日2月12日】長崎県雲仙市で11日、赤松広隆農相と農水産業者が話し合う集会が開かれ、漁協関係者から国営諫早湾干拓事業（諫干）の開門調査を求める声が相次いだ。赤松農相は県知事選の期間中であることを理由に賛否を明らかにしなかったが、「開けるといふ声が長崎で非常に多いのは意外だった」と驚きを隠せない様子だった。

農業者から反対の声出ず

集会は、開門調査に反対の立場を取る民主党長崎県連の主催で、約200人が参加。漁業者は諫干が有明海に漁業被害をもたらしていることを指摘し、開門調査を求めた。集会には農業従事者も参加していたが、開門反対の声は出なかった。

赤松農相は「長崎県は絶対反対で、佐賀、熊本、福岡県は調査してくれという地域性の問題と違って」と述べたうえで「長崎県だけの問題ではなく周辺の県もある。国の事業とは言っても開門する場合は地方自治体と合意の下で進めたい」と語った。

諫干開門 長崎県に揺らぎ

湾内3漁協 「反対」の一角崩れ

【毎日2月12日】国営諫早湾干拓事業（諫干）の開門調査に、「絶対反対」を貫いてきた長崎県が揺らぎ始めている。諫早湾内3漁協の一つ、瑞穂漁協（雲仙市、68人）が賛成に転じ、11日あった赤松広隆農相と農水産業者らとの対話集会でも開門を求める声が出た。湾内漁業者と干拓農業者の総意。それが反対の最大根拠だったが、その一角が崩れ、開門を求める声は県内外でさらに大きくなりそうだ。

漁獲高落ち 苦渋の選択

3日あった瑞穂漁協の全員協議会。出席者によると、石田徳春組合長が開門調査への賛成を切り出すと、これまで反対してきた矢坂真一郎前組合長が突然「干拓地営農者の理解を得て、開門できれば」と賛同した。続いて5人が賛成。組合長は「反対意見は」と3度念を押したが、挙手はなかったという。

瑞穂漁協は南部排水門に最も近い海域が漁場。これまでも調整池からの通常排水で漁場が荒れ、漁網にへド

ロが絡まるほど。組合員の水揚げは最盛期の10分の1程度しかない。開門すれば淡水が大量に流れ込み、漁場への悪影響が懸念される。それが開門反対派の主張だったが、漁獲高の落ち込みを背景に「以前の漁場を取り戻せる可能性があるなら賭けるしかない」というのが賛成派の立場だ。矢坂前組合長は「漁師として私も開門すべきと思っていた」と苦しい胸の内を明かす。一方、他の2漁協は反対姿勢を変えていない。小長井町漁協（諫早市、98人）は、5日の定例会合で新宮隆喜（たかき）組合長が「開門には絶対反対」と改めて訴えた。国見漁協（雲仙市、45人）も同様で、酒井八洲仁（やすひと）組合長は「瑞穂の決定による影響はない」と語る。だが、反対漁協も一枚岩ではない。小長井町漁協では、新宮組合長は反対だが、松永秀則理事を含む9人の漁師は開門を求める訴訟に参加している。小長井町漁協は最盛期の85年当時、約6億5000万円の水揚げがあったが、ここ数年は1億円程度に低迷。

漁協は県や諫早市から養殖アサリやカキの種苗放流などで年間約1億円の補助を受けており、松永理事は「その恩恵で組合は県などに本音を言いにくい。瑞穂の決定が漁民の本音だ」と断言する。干拓推進を訴えるPR資料などに「湾内3漁協は反対」などと記してきた長崎県。瑞穂漁協の変化は県に衝撃を与えた。毎日新聞が方針転換を伝えた今月4日、瑞穂

漁協には真偽を確認する県幹部の電話があり、県諫早湾干拓室も説得に乗り出すことを決めた。折しも、長崎県は21日投票の知事選の真つ最中。石田組合長は「県が何を言っても絶対対応しない。次の知事は、開門調査実施の英断を下してほしい」と語った。

福岡県ノリ色落ち「予想以上」

民主・野田議員が視察 柳川市

【西日本2月13日】県沖の有明海で深刻化している養殖ノリの色落ち問題で、地元の民主党衆院議員の野田国義氏（比例九州）が12日、柳川市沖の色落ち現場を視察した。県沖で色落ちが確認されたのは4年ぶり。これまでに栄養塩が流れ込む河川の流量を増やすため、筑後川や矢部川上流のダムの緊急放流が行われたほか、漁場全体の約2割に当たるノリ網が撤去されている。現場やノリの状況を見た野田氏は「沖に出るにつれて予想以上にひどい。数年後には、ノリ養殖の戸別所得補償も考えていかなければいけない」と話した。視察後の意見交換会には、地元漁業者約20人が出席。「最近潮の流れがなくなると、プランクトンが死ななくなると」「今の有明海で収入が上がっているのはノリだけ。ノリが取れなくなったら死の海になる」などの意見が上がった。